

人間国宝北村昭齋先生と学生との対話

高橋隆博

今年の5月26日、永いおつきあいをさせていただいている北村昭齋先生が、わざわざ時間を割いてご来館いただき、あわせて法人の代表者を表敬訪問された。かねてから念願していたことであった。

北村先生は、平成11年、「螺鈿技術」によって国から重要無形文化財保持者（いわゆる人間国宝）に認定されたわが国漆芸界の屈指の作家であり、至宝である。これよりさき、先生は創作活動のかたわら、正倉院宝物中の漆工品や国指定の文化財、つまり国宝や重要文化財に指定されている漆芸品の修復・復元を永年にわたり手がけられ、そのすぐれた技量と功績によって選定保存技術保持者に認定されている。ご尊父の大通先生も同じ認定をうけており、父子二代にわたっての認定は稀有なことである。

螺鈿とは、夜光貝とか鮑貝、蝶貝などの貝を文様の形にきりすかし、それを器物に装着して装飾する技法のことで、この装飾法の歴史は、はるか中国・東周時代にさかのぼり、唐時代には代表的な漆芸技法であった。螺鈿鏡や螺鈿紫

檀五弦琵琶などをあげるまでもなく、日本の螺鈿技法の源流は正倉院宝物に求められ、その後も、わが国のほこるべき漆芸技法として展開してきた。

もう20数年ほど前のことだが、北村先生に「博物館実習用に、作品をつくってくれないか」と、大変に失礼なお願いをしたところ、「学生さんのためならば」と、はるか材料費にもおよばない薄謝で応じていただいたのが『螺鈿蒔絵宝相華文合子』である（図1）。人間国宝の作品をつかっただけの授業など、まことに贅沢きわまりないことで、おそらく他の大学などではありえないことだろう。もとより、大学にとってもかけがえのない文化遺産であるから、学生諸君には「見せる」にとどめてる。

本年は、博物館開設10周年を迎え、あわせて関西大学創立120周年の記念事業の一環として「名品展」を開催し、そこに先生の作品を展観できたことは大きな喜びであった。この機に、またも先生に「学生にお話をさせていただきませんか」とお願いしたところ、「お役にたつなら、



図1 螺鈿蒔絵宝相華文合子（北村昭齋作）

かまいませんよ」とご快諾いただき、ご来館となったのである。私たちは、博物館や美術館、あるいは百貨店などで芸術作品にふれる機会を多くもっているが、作家に会うことなど、もっといえば作家の息づかいまでも感じることも、そうありはしない。先生のご来館を「かねてから念願していたこと」といったのは、まさにこの一点においてである。

その日は、数10名の学生を前に、はじめは私との対談形式にはじまり、先生の学生時代（東京芸術大学）のこと、芸術と創作活動のこと、文様と技法のこと、そして文化財の保護と修復の話へとおよび、さらには先生と学生とが作品をとり囲む形で楽しい対話へと移っていった。3時間をこえてのやりとりは、学生諸君にとっては思いがけない、しかも貴重な経験となったようで、それだけにひととき充実したひと時となった。

「口をもたない作品」とは、よく言い慣らされてきた言葉で、作品自身は見る側には何も語ってはくれない。ただそこに「在る」だけにすぎない。作品に口を開かせて、「何か」を語らせるのは、作品を目の前にする鑑賞者である。北村先生は学生の研究意欲をかきたたせるためにも、この作品にさまざまな技法を凝らされたのである。

合子の木地（ボディー）は、桧を薄く細くつくった材をグルグルと巻いた構造であり、これ



は、昭和48年のX線透過写真撮影によって、正倉院宝物の漆胡瓶やいくつかの銀平脱合子などに確認された特殊な技法であって、その後、同じ技法の漆工品が統一新羅時代の半月城離宮池の雁鴨池からも出土し、さらには中国・唐代の漆工品にも確認されている。蓋表では、中央の六弁花をタイマイ（海亀の甲羅）であらわし、その中心に金の薄板（平脱技法）を置き、さらにその周囲を夜光貝による螺鈿でくくっている。その周りには螺鈿とタイマイ、金蒔絵によって宝相花文をあらわしている。宝相花は想像上の花で、奈良・平安時代にかけて大いに採用された仏教を荘厳する花文様であった。

北村先生は学生との対話のなかで、作品にあらわした技法と意匠の特徴と歴史性について説明され、あわせて作品解釈の糸口をわかりやすく解説されたのであった。学生が「もの学」の真髄にふれたことはいまでもなく、感激一入の状態であった。北村先生に感謝するほかはない。

大学の教育と研究は、文献を中心に行っている。というより、むしろ「文献学」に傾いているといつてよい。私たちは、もっと「もの学」の重要性を認識すべきであろう。そして、博物館こそは、「もの学」の中核をなしているのである。



作品について解説する北村先生